

---

# COMPLEX VARIETY!

T m

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

COMPLEX VARIETY！

### 【Nコード】

N73620

### 【作者名】

Tm

### 【あらすじ】

能力的に平凡な捻くれ者の義姉と文武両道容姿端麗チートな義弟のやりとり他それを取り巻く人々のあれこれを綴った、番外編寄せ集め。

閲覧は本編『COMPLEX TRIP!』最新話まで読後推奨。読んでなくても気合で読める。お暇つぶしにご覧ください。時系列はバラバラです。

## OTHERS！（前書き）

時系列：楓 高校二年生。新 高校一年生。入学して三ヶ月経った  
か経たないか、くらい。

## OTHERS!

「お前さ、何様なの？」

なにさま。出来れば王様ゲームの王様になつてみたい。なーんて言ったら、ぶつ飛ばされるんだろうなあ。そんな剣幕で、彼は言った。

「あいつ、お前のことすっげー慕ってんじゃん。見てても解るよ。なのになんなの、あんた。いやに新に冷たくね？　なんか恨みでもあんの？　あいつの姉貴なんだろう？」

て言うかその前にアンタ誰ですかまず自己紹介してから文句垂れてくれませんかね。

放課後に呼び出されたと思えばこれですよ。流石に告白とまでは勘違いしないけどね、まさか新さんのことで男に文句言われる日が来るとはあーた、夢にも思いませんことよ。恐るべし新さんフェロモン。

校舎の壁に寄りかかりつつそんな事をちくちく考えていると、顔の横にばん！　と平手を突かれる。わお、お約束ウ。どうでもいいけど君、体格いいね。バスケ部かなにかかしら。見上げているとやや、首が疲れる。

「聞いてんのかよオネーサン」

「聞いてますがその前にこちらもお聞きしてもよろしいでしょうか」  
慇懃無礼に言い返すと、敬語が耳慣れないのか怪訝そうな顔を浮かべた。すかさず畳み掛けてみる。

「私、二年七組の出席番号は六番、一条楓と申します。対するあなたについてお尋ねしますけど、学年とクラス、お名前を伺ってもよろしいでしょうか。あ、出席番号、好みのタイプにつきましては、黙秘可能ですけれど」

「いや、っーか好みのタイプって」

「うん別に興味はないんですけどね。せめてホモかヘテロかだけで

も確認できればなーって」

なにを言っただこいつ、てな顔をされる。そんなこと言っただてねえ？ その辺確認しなきゃ私の対応というものもまたベクトルが違ってくるというもの。ライクかラブか。その辺りの見極めは重要だと、お姉さんは思うのですが。じつと待っていると、少し戸惑ったように目を泳がせる。

「いや、てかなんでこの状況であんたに自己紹介しなきゃなんねーの」

「身元を晒せないけど私には文句を言いたいと。匿名乙」

「ハア？」

「いいんですよ。私は何も知らなくても。ただ貴方が私に直談判するに当たり自身はなんの情報も開示せずに自己主張したと、ただそれだけの情報が私の中にインプットされるだけです」

ひく、と彼の表情が引きつる。存外正直なタイプのようだ。人を呼び出すにしてもこんな人気がないところで二人きり。誤解してくれと言っているようなものだけれど、その辺りこの体勢も含めて自覚はあるんだろうか。なさそうだな。脳筋っぽいし。

と、つらつらどうでもいい考察をし始めたところで私の視線に耐えかねた彼は身を起こして不機嫌そうに顔を背けた。

「一年一組出席番号は十七番、相模明さがみ あきりだっ」

これでいいか文句あつか好きなタイプなんていわねーぞつ。と言わんばかりの顔で彼は答えてくれた。新さん、随分といじりがいのあるお知り合いがいることで。いやはや、若干羨ましいぞお姉さんは。

じーっと危ない目つきで見ているのがばれたのか、その相模君とやらは毛を逆立てるように警戒して一歩後ずさった。

「なんだよ！」

「いや、その言葉そっくりそのまま進呈します。私に言いたいことがあるんでしょう？ 自己紹介も済んだことですし、どうぞ？」

このままつやむやにしていじり倒して追い払ってもいいが、いか

んせんこれから夕方の再放送がある。早く帰りたいので巻きでいきます。ちゃちゃつと聞いてさっさと帰ろう。

「……いや、あの、あ……っ」と

オイ。いい加減にしろよ。出鼻くじかれたから言いたいことすっ飛んだとか言うんじゃないだろうなふざけんじゃねーぞこちら時間との勝負なんだよテメーのちゃんな正義感に付き合っで見逃したらどうしてくれんだこのストコドッコイ。

頭の中で罵詈雑言、表面上はにっこり仏の笑みで対応するお姉さんです。出来た姉を持って幸せね、新さん。

「解りました。では纏まりましたらその旨ご連絡ください。週休二日土日休みで午前七時より午後十一時まで受け付けておりますのでその間にご連絡くださいますよう、お願いしますね。これ、専用アドレスです。ではごきげんよう」

「あつ、おい」

颯爽と去る、姉。その後姿は見るものたるや啞然とさせるほど、清清しい去り様だったという。

……だといいなとか考えながら、家路に着いたある日の出来事。

後日、彼から連絡が来たかという、そうでもなかった。ただ新さんがひどく陰鬱としたオーラで『相模という男を知っているか』と聞いてきたので、知らないと答えた。彼の日の出来事で私の記憶に残っているのは再放送のドラマの悪人だった主人公がいい人になった途端腹を刺されてぶっ倒れーなエンドだったということだけ。

あ、アドレス？ ダミーですダミー。いちいち答えてたら身が持ちませんってえ。アハハ。

## OTHERS！（後書き）

作者の筆力不足による必死な補足説明：

新さんのお友達の相模君が、姉より冷遇を受ける彼に同情し鬼畜姉に直談判に向かったところ見事返り討ちにあい、後々我に返って律儀にアドレスに連絡してみたものの繋がらず痺れを切らして新さんに詰め寄ったらあらまあ本末転倒、事が発覚して新さんにより懇々とお説教をくらい釘を刺されましたというオチ。

ついでにその後相模君が姉のキャラに興味を持ちかけたので新さんはフラグが立ったと早とちりして大真面目に相模君を脅しました。

OTHERS！？（前書き）

時系列：楓 高校二年生、相模君高校一年生、季節は初秋



## OTHERS！〜？〜

「よお」

木枯らしが吹く。一步、また一步と乾いた砂利を踏みしめ向かう先には、彼がいた。気だるそうに壁に寄りかかり、足を組み、けれどこちらをしつかりと見据え力強い眼差しを容赦なく突きつける。待っていたと、言わんばかりに。

みたいな昭和のカヲリ漂うロケーションで佇む彼に一体どんな言葉をかけてやればいいのだろう。私は彼の期待に応えられるだろうか。息を呑み、慎重に声をかけた。

「そこは、こう……意味もなく偉そうに威厳を無駄に醸しつつ、口にはどっかで筆取り取ってきた草を口にばくつとしているのがセオリかと」

「誰が番長だ。銜えるかんなもん」

「やだ。銜えるなんて、卑猥な。何を銜えるつもりなんですか。セクハラは止めてください」

「は？……なっ、バツツ、アンタのがセクハラだろ！」

期待通り顔を真っ赤にして取り乱す少年、もとい相模明君。聞くところによると、新さんのご友人らしい。クラスの男子から言伝にその名前を出されたとき本気で誰か見当がつかなかったけれど、呼び出された校舎裏でその姿を目にした瞬間に漸く思い出した。

ああ、あの、相模君。弄り甲斐のあるあの相模君ね。

なるほど。久しぶりの好感触に記憶が蘇る。そういえばあの時は話を聞いてあげられなかった。そのせいか今回は放課後じゃなくて昼休みに呼び出し。学習能力はあるくせに弄り対処の応用力はないらしい。ますますもって将来有望。

「それで、何か御用ですか？ また新さん関係でしょうか」

「いや、新は、別に」

なにやら口の中でもこもごとく言っているため言葉が尻すぼみにな

ってよく聞こえない。そんな彼に近付き、顔を覗き込んだ。随分と背の高い子だ。そして隙が多い。

「銜えたいとかいわないでくださいね。そういうのは直接本人に交渉していただかないと」

「なっ、んの話だっ。やめろっ、おっ、女がそういうことを軽々しく言うな！」

「そういうことってどういうことですか？　どういう意味ですか？　詳しく教えてくれませんか」

「クツツ」

「だあーもー、くそー。とか呟いて後退りして、しゃがみこんでしまった。頭を抱えているから顔は見えないけれど、耳が真っ赤だ。初っ端から飛ばしすぎてしまったかもしれない。

いけないいけない。こういうことはじっくり行かなければ。

「あの、すみません。悪ふざけが過ぎましたね。それで、御用は？」  
中腰で問いかけると、ガシガシ頭をかいていた彼の手がぴたりと止まる。それからそろりと顔を上げ上目遣いで恨みがましそうに見上げてくるものだから、嗜虐心がいつそうそられたのは言うまでもない。なんなのだろう。新さん含め、やっぱりこういうことは似たもの同士が集まるってことなんだろう。愉快的仲間達だこと。

思わず浮かんだ暗黒な笑みをモロに見てしまったらしい相模君は顔を引きつらせた。

「……アンタ、絶対ヘンだよ」

「然様ですか。それが言いたくて私をここに？」

「いやっ、ちがくて！　そうじゃないんだ」

大慌てで言いながら、がばっと立ち上がる。直情的な子だ。

「あの、俺、謝りたくて。アンタに、いや、一条先輩、に」

「アンタでいいです。先輩後輩で馴れ合うような仲でもありませんし」

「ていうか一条先輩って呼ばないで。虫唾が走るわ。言わないけど。あ、まあ、ハイ、いや……うん」

何が後ろめたいのかでかいナリしてしどろもどろしながら目を泳がせる相良君。別に時間が押してるわけじゃないんだけど、早くしてくんないかな。じゃないとまた弄りたくなってくるんですがね。なんなんだろう、このイラツとするような、和むような、矛盾した気持ち。人はこれをジレンマと呼ぶのだろうか。

「俺、謝りたくて。この間はあの、アンタのこと良く知りもせず色々勝手なこと言っちゃって、本当に」

「ちよつと待ってください」

びしつと平手を出してストップをかける。のけぞって口をつぐんだ相模君が続けられないよう、すかさず追い討ちをかけておく。

「貴方が私のことをどの程度知ろうと知るまいと先日かけられた言葉に私が不快感を覚えていれば理由の如何に問わず謝罪を受け入れるつもりはない、ということは置いておきまして」

「あ、え？」

「謝りたい、って。どうして。貴方は貴方なりの主張があつて私を呼び出したのでしょうか？ それに応えなかった私に文句があるうと謝罪する謂れはないと思うんですけど」

矢継ぎ早にぽんぽん言っているせいか頭がついていかないらしく、相模君の頭の上にはてなマークが量産されて見える。それでも辛抱強く待っていると、やがて相模君はなにやら気まずそうにもごもご呟き始める。

「いや、俺もあいつに色々言われて思うところもあつたっつか」

「あいつ。色々言われて。新さんにですよね。何を？」

「何をつて、そんなこと」

これだけ見つめてちつとも目線が合わない。私は猛犬かつつの。逃がさん。

「私には関係ないと。本人の目の前でこれ見よがしに匂わせておいて随分ですね。相模君は焦らしプレイをご所望でしょうか。けったいなご趣味をお持ちで。いや、意外です」

「なっ、ちが！ 違う！ なんでそうなるんだ、俺はただアンタに」

「私に、なんででしょう。なんと言っていたんでしょねえ、新さんは。あらかた『姉さんは悪くない』とでも言っていたんでしょねえ。アラ、図星。いやはや、全く私は優しい弟を持って幸せです」  
しまった、と思ったときには相模君の眼差しが怪訝なものに変わる。今度は私の方から目を逸らし、どこ吹く風とばかりにそ知らぬふりをした。

「謝罪は結構です。受け付けません。棄却します」

「は？　ちよつと待てよ」

「私は貴方に謝罪が必要なほどのことをされた覚えがありません。よって勝手に謝られても困ります。お解りですか。お解りですね。ではハイ、これにて一件落着。さようなら」

人によつては不快感を煽るような言い方をした。なのにまだ納得していないのか、踵を返した私の肩を掴んで引きとめようとしてくる。全く煩わしい。こいつもお人よしだのなんだのと言われる類の人種だ。振り返り、納得していないような彼を仰ぎ見ながらさりげなくその手を外す。

「いい友人を持って新さんが羨ましいです。今度ウチに遊びに来てください。交渉の際にははりきつて援護させてもらいますよ」

につこり微笑むと、呆氣にとられたように彼の目が丸くなる。そのきょとんとした様が誰かを思わせて、私は少し笑ってしまいながらも今度こそその場から立ち去ることに成功した。

我に返った相模君が後ろから『こういう意味だ』と叫ぶ声が、妙に心地よかった。

『姉さんは悪くない』だつて。

「悪いに決まってるじゃん、バカ」

降り積もる悪意は、木枯らしにも揺るがない。彼にこの心は、ま

だ  
届  
か  
な  
い  
。

## OTHERS！??（前書き）

時系列：楓 高校二年生、相模君高校一年生、季節は秋下旬。ネタ  
バレにつき本編最新話まで読後推奨。

## OTHERS！〜？〜

目を離れた隙に闇は訪れる。冬はいつもそう。気がついたときにはもう窓の外は真っ暗でした、なんてよくある話だ。

パブロフの犬のように、暗くなったら帰り支度を始める彼らを尻目にいつものコンビニへと向かい常田さんを待つ、なんてのが私の法則。けれど時々、そう、ほんの時々無意味にそれに抗いたくなつて、気まぐれで同級生に紛れて電車で帰ったりする。勿論常田さんにはメールを入れておく。

気まぐれの癖にいちいち連絡を入れる、なんて億劫ではあるけれど不自然な行動は私には許されていない。義務はいつでも携帯しておく。それが私に課せられた日常。

そうして適当に時間を潰し、適当な電車に乗って、いつもより遅く帰宅する。所詮私に許された気まぐれなんてそんなもの。不満があるわけじゃない。ただ、そうだ、単なる子供じみた反発心だ。

ただそれだけの為にちよつと遅く帰宅する。少しでも遅く、けれど違和感の無い程度に時間を潰して帰宅する。馬鹿みたいだと自分でも思う。くだらない。茶番だ。それでもこれでほんの僅かなずれを微修正している。

こつ見えて必死なのだ。こんな些細なことにも。

その日は学校近くの駅の周辺で時間を潰していた。そういう時は本屋や雑貨で物色したりその辺のコーヒショップでコーヒを飲んだり、そんな風にして時間を潰すけど、その時はというともうあらかた済ませてさほど時間も余っていなかったから最後にコンビニへ向かっていた。何をするわけでもなく適当にふらついて、ちよつと立ち読みして、肉まんでも買って帰る。大抵そんなものだ。

そうしてふらりと目的のコンビニに辿り着き、さして興味も無い雑誌のどれに手を掛けようか視線を巡らせているとき、それは聞こえた。

「あ、中華まんいいですか。えーと、あんまん二つと、肉まん二つとピザまん二つ、カレーまん一つ、チョコまんひとつ、あと子猫まん一つ」

九つ。割と多いせいか店員が取り分けながら聞き返したりしている。どんだけ大家族なのか、それとも使い勝手のいいパシリか中華まん好きの大喰らいか。

声はどうやら若い男性のようだった。あれだけ頼めば備蓄していた中華まんはごっそり減って寂しい中身を晒していることだろう。そんな豪快な買い方をする人間にちらりと興味が湧き、雑誌に伸ばした手を引つ込め商品棚の列から悦子の如く覗いてしまった。

さて、中華まんを九つも購入する猛者は一体どんな奴なのか。

ほう、なるほどねえ。

「ありがとうございますー」

間拔けた効果音が鳴り、その人物はコンビニから出て行った。どうやら私の存在に気がついていないらしく、そんな素振りはない。そのままさっと手に取った雑誌を盾にしてその彼の後姿を見送っていたわけ、なんだけどね。そこで振り返っちゃうのがまあ、らしいっちゃあらしいかもしれない。

「げっ」

って聞こえたね。

いや、正確にはある程度の距離と分厚い硝子を挟んでいたわけで、聴覚的にはアウトオブ圏内だったわけだけど、まあそこはホラ、解りやすいから。いいリアクションについてはもう、先日とつくりと確認済み。

挨拶代わりににつこりと微笑み返し、私は当所の予定を変更し雑誌を返してから何も購入せずにコンビニから出た。実も蓋もない「



「ありがとうございましたー」に見送られ、私は存外軽快な足取りで、雪像の如く固まる彼に近付いた。

「こんばんは」

「うっ」

うっ。随分と嫌われたものだ。宵闇でも解るほど顔が引きつっている上に、大げさすぎてわざとなんじやないかと疑うほどに仰け反っている。これは寒さのせいとかで誤魔化せるレベルじゃないな。まあ嫌われてようが苦手意識をもたれていようが避けられていようが愉快なことには変わりはない。あそこで振り返らなければ見逃してやったものを、どうも彼はここぞというときに外さない性質らしい。つくづくオイシイ子だ。

「随分と沢山、中華まんを買われていましたね」

「いや、あの、これは」

こういう風にどもっていると聞いてくれと言っているようなもの。なんだけど、自覚は無いのだろうか。無いんだろうな。あえて同情めいた表情で、そのうろたえる顔を覗き込んだ。

「何かお悩みでしたら相談に乗りますよ……?」

「パシリじゃねーよッ……あ、う、くそっ」

しまった、とばかりに困惑やら焦燥やら色んなものが混ざったな。んともいえない表情をする。

新さんとはまた一線を画する素直さ加減だ。ジャブは上々。これだから見るとイジリたくなる。

「まあそつでしょうね。立ち話もなんですから歩きませんか。それとも他に行くところでも?」

にやつきそうな頬をどうにか抑えて先手を取った。彼はなんだかもごもご言っていたけれど、私が先に歩き出したので渋々とはばかりについてきた。

ここは新さんと違って押しに弱いんだよな。あの子の場合寧ろされるよりごり押しするタイプだから。類は友を呼ぶと言っても、早々全く同じというわけでもないらしい。そうでなきゃ面白くない

けどさ。

「寒いですねえ」

「あつ、ああ」

白い息が頬を掠める。ぎこちなく隣を歩く彼は、通学用の鞆とさつき買った肉まんの袋を携え、肩には馬鹿でかいスポーツバッグをぶら下げている。いつも思うけれど、一体何が入っているのか。運動部で無い私にはその鞆の中身にはいつも未知を感じる。

「相模君は、何部なんですかね」

今はテスト期間だから帰りがかち合ったのだらう。普段ならば私が帰宅途中にこういうスポーツバッグを掲げた人とすれ違うことは殆ど無い。

「あー……俺は、アレだよ。サッカー部」

「もしかしてスポーツ推薦ですか」

「……まあ」

なにやら照れがあるのか首の後ろを掻きながらぶつきらばうに答えてくれる。

しかしどう見ても体育会系だと思っではいたけれど、推薦入学かとなるともしかしたらこう見えてレギュラーも獲得しているかもしれない。流石新さんの友人、並なようで並じゃなかった。

まあ私も推薦だけど、普通推薦だ。けれどうちの学校のスポーツ推薦と言ったら割と有名なようで、卒業者は大手大学入学者やスポーツ界で活躍するアスリートをちらほらと出したりしている、その筋では中々に名の知れた学校だったりする。そちらに特化した特別クラスまであるほどだから、中々の力の入れようだ。それ以外は手を抜いてんじゃないかってくらい何の変哲もないけど。

実を言うと新さんも陸上競技の枠で推薦されるかという話も上がったけれど、本人がそれを辞退して普通に受験して普通に首席を取ったりしていた。けつ。

まあ新さんとはとかく相模君はこの様子だとスポーツ推薦らしいけれどそうなると特別クラスに配属されるもののはずなんだけど

。私が考えていることがわかったのか、相模君はうつすらと苦笑した。

「推薦は、まあ、色々と優遇されるから。でも俺そっちに進む気はないし、普通科希望したんだ」

「へえ……」

色々、ね。確かにその辺りは色々免除されるらしい。どれがどの程度かはあまり詳しくは無いけれど。

「なるほど、それで相模君は食いしん坊なんですね」

「ちげーっつの。食うにしてもただ中華まんにこだわってんだよ。これは、あーっと、ウチの奴らについて買ったっつーか」

それは一人二つずつ以上食べる計算なんだろうか。どの道基準からやや逸脱している気がする。もしくは九人家族。ワオ、相模さんちの特集組めそう。

夢を広げていると疑わしげに相模君が覗き込んでくる。

「アンタ絶対なんか勘違いしてるだろ」

「いえ別に。ちなみに相模君のお宅では一日何回洗濯機を回すのですか？」

「やつぱ勘違いしてんじゃねーかつ。これは俺と親父と母さんとしーちゃん、あと姉貴と弟と妹のぶんだ」

ムキになっちゃってマア。まんまと個人情報掠め取られたとかいう自覚も無いんだろう。家族構成ゲットだぜ。

しめしめ脳内プロフィールに書き込みつつ、それでも腑に落ちなく、ん？ と首をかしげた。

「二つ余りませんか？」

「あー……んー弟は双子なんだ。でー、あーあと一個はー……うん」

なんと弟君は双子。大家族とはいかないまでもなかなかの構成人数。感心している私を尻目に相模君はなにやら一人で納得したように袋をかごそ弄り、見慣れた紙包みのそれを二つ取り出して、歩きながら私の前にそのうちの一つを差し出してきた。

「ん。アンタ肉まん食える？」

「はい、まあ。あの……」

「じゃ俺はカレーにしとこ」

何か言う前に、はぐつと大口でそれを食べ始めた。

受け取った手前今更何か言うのも無粋か。少し躊躇したけれど、ありがたく私もご馳走になることにした。

「イタダキマス」

「うん。んで、それでチャラな」

私が一口目をかじった瞬間、もう最後の一口をぺろりと平らげた相模君がなんてこともなさそうに言った。何を言われたのか即座に意味を図った私は偉いと思う。

「ほのひふようは、ん。ないと、以前にも言ったはずですが」

不覚にも不意を突かれたせいかちよつと喉に詰まる。飲み物が欲しいと思いつつそれでもなんとか嚥下すると、相模君ははーっと大きく白い靄を頭上に吐き出した。

「いんだよ。アレで終わりじゃ俺の気が済まなかったの。アンタは大人しくそれを食ってくれりゃーいい」

「律儀ですねえ」

「ちげーよ。俺が迂闊だった。そんぐらい、解ってる」

何を言うかと思えば。自責の念でも抱いているというのだろうか。たったあれだけの、あの程度のことです。

思わず振り返ると、彼は数歩後ろに立っていた。私が振り向くと同時に、潔い速さで頭を下げる。

「悪かった。もうつまんねーことでアンタを煩わせたりしない。約束する」

イヤどつちかという大いに煩わせたのは私の方だと思っんですけどね。散々私がおちよつたことを差し引いてみればお釣りが来るほどだというのに、彼という人はそれに思い至るという発想すらないらしい。

どうして、こういった人種はこうも真っ直ぐなんだろう。真っ直ぐではないと死ぬ病にでも罹っているのか。我を通さねば我慢な

らない何かを持っていると言っても言うのか。普通に考えてこんなこと、道端に落ちた小石を足で跳ね除ける程度のことだ。それをいちいち拾って丁度いい場所に置くとか、普通に考えてありえない。

ありえないが、厳密に言えば彼がしていることもその類のことだ。馬鹿正直すぎてこつちが白けてくる。どうぞ付け入ってください、と自分から宣言しているようなものだというのに、こういう類の人間は酷く真面目な面持ちでこれをやり通そうとする。

きつと知らないのだろう。そういう人間がいるように、そういう人間を見て苛立つような人間がいるということ。

口元が歪んでいるのがわかる。傍目から見て解るほど、私は今皮肉めいた笑みを浮かべていることだろう。

「やめてくださいよ。頭を下げられる義理なんてありません。それともなんですか、また新さんに何か言われましたか」

「新は関係ない」

言ってくれる。その矛盾を吊り下げて私にどうしろと？　してもいいの？　弄ってもいいの？　心行くまで、あなたを。

無防備すぎる。新さんも、あなたも。

「そうですかねえ。そこまで頭を下げなきゃならない理由なんてないでしょうに。何を言われました？　事情があるんだーとか？」

いかにも言いそうだ。当然のように私をかばう。それが逆効果だと、知っているのかいないのか。どんどん嗜虐的になっていく思考に歯止めをかけそこない、あけすけな冷笑を相模君にまで向けてしまう。彼は関係ないのに。

それでも。

それでも相模君は、揺ぎ無くキツパリと首を横に振った。

「事情なんざ探せばそこら辺に転がってる。誰にでもあるもんなんだ。そんなのは当たり前だ。……だから、だからこそ、ごめん」

誰に、でも、か。

これ以上言えば、私が悪者かな。執拗に頭を下げ続ける彼のつむじを見つめ、息をついた。

寒さのせいだろうか。どうにも、肩に力が入ってしまったようだ。

「わかりました」

言うや否や、彼は勢い良く頭を上げ、スッキリしたようにまた大きな息を吐いた。

「あーっ、やっと言えた。アンタなかなか言わせてくれないから、マジ参った」

「……それは、どうも」

私だつて貴方がそれほど気にしているとは思わなかった。私自身、気にしている以前に忘れていたくらいだし。

というか日常茶飯事過ぎてあんなことにいちいち気を揉んでたら今頃登校拒否を謳歌しているところだ。この子は私を舐めてるんだろうか。そう言ったらどう返すだろう。

悪い虫がうずきだすのを感じつつ、これ以上は駄目だーと自制をかけて歩みを再開させた。

「子猫まんは妹さんにですか」

「あ？ ああ、うん。好きそうだなって」

はにかんで答える彼の目元が、柔らかく緩んでいる。これがお兄ちゃんの顔って奴なんだろうか。妹さんが可愛いんだろ。それでも家族全員ぶんキツチリ買っちゃうところがまた律儀。

きつと一つ多かったのは、年頃の高校生に中華まん一つじゃ足りないからなんだろう。なんなくそれを私に分け与えたことこそ、彼の人間性そのものを示しているような気がした。

本当に、新さんはいい友人を持ったようだ。

「何笑ってたんだよ」

「笑ってました？」

「笑ってるだろ」

笑ってた。

そうか、まだ、私は。

「どうした」

「……いえ。ああ、大分来すぎましたね、スイマセン」

気がつけば、駅のすぐ近くまで辿り着いていたらしい。謝ると怪訝な目を返されたので、お答え通りにやりと微笑み返してあげた。

「お家、すぐ近くでしょう。通り過ぎてしまったみたいで、どうもすみません」

「なんでアンタが俺んち知ってんだ！」

うわ、吃驚通り越してビビッていらっしやる。いや知らないけど、通り道の途中で一本道を歩いていたのに視線がちらちら曲がり角に向いてたから、そうじゃないかなーと当りをつけただけでありますよ。けどこれと言質は取れた。相模君ちは駅の近く。個人情報までもゲット。

「すいませんねえ、こんなところまで。もうこの辺で結構ですよ」

「いや、どうせだから最後まで……」

「最後まで？ 困ります。私たち学生ですよ。ましてや出会ったばかりですし、そういうことはちゃんと段階を踏んで……」

「な、ん、の、は、な、し、だっつ」

くいつきいいなあ。これだから病み付きになっちゃうのよねー。

ある意味たちが悪いと思うの、この人。

噛み合わない会話にもどかしいのかガシガシ頭を掻きながら、相模君はげんなりしたように呟いた。

「アンタさあ、いい加減にしたほうがいいよホント。俺だからまだいいけど、男に向かって軽々しくそういうことをさあ」

「だからですよ。相模君になら安心して言えるんです」

「なっ、どっ、どういう意味だッ」

声が大きい。駅も近いため道行く人がちらほら見てくるけど、相模君は気付かない。私もどうでもいい。だって実害は無いし。

なにやら真っ赤になっただけを連想している相模君に、満面の笑みを浴びせて宣言してやった。

「だって女に興味ありませんしね。安心安全です」

「バツ……止せ！ 道のと真ん中で変なことをッ。おい、あのな、

この際だから言っとくけど俺は女の方が好きなんだ！」

私は『女に興味が無い』と言っただけだしそもそも道のと真ん中で『女の方が好きなんだ！』と宣言する貴方は馬鹿じゃないんですかね。

とは思えどこの流れを止めるのは惜しい。続行。

「女の方が好きだけど男もイケる口と。なるほど、流石相模君、両刀使いとは格が違いますね。おみせしました」

「ちつが……あーもー！ 勘弁してくれよッ」

ああ楽しい。愉快でたまらない。打てば響くとはまさにこのこと。いい声で鳴いてくれるわこの子。本当に将来有望だ。メシウマすぎて箸が止まりません。

「あーくっそ。もう解った。もう我慢ならん。おいオネーサン」

顔を上げてキツと睨みつけるかと思うと、威圧するように見下ろしてきた。地雷を踏んだことには気付いていないらしい。

『オネーサン』はお姉さん、嫌いなよ、相模君。

「あんまり男を舐めるなよ。そういうことばかり言ってるとな」

「す、すみません。からかいが過ぎました。私、つい……」

えっ。と目を丸くした隙に、反省の念を眼差しに込めてじつと見つめてみる。さっきまで凄んでいた彼はどこへ行ったのか単純なほどあっさりと息を詰ませた。

「そうですよね。違いますよね。相模君はそういう人ではありませんねよ」

「あつ、うん」

あつ、うん、だつて。きょとんと惚けた眼差しに俄かに噴き出しそうになりつつ努めて表情を引き締める。

さあて、メインディッシュ頂きます。

「私、ちゃんと解ってます。相模君は、違ってます」

「あ、」

相模君の戸惑いに揺れる眼差しが、私の真摯な眼差しとかち合う。二人の思いが交差して。



「相模君は……新さん一筋なんですよね。解ってますから、私。道ならぬ二人の恋を応援してます。永久に」  
ぴき。

と、時が止まった気がした。主に相模君の周辺で。

ぐ、ぐ、ぐ、と相模君の表情が泣くんじやなかるうかというほど歪み、そして彼は思いつき踵を返した。

「帰るッ。帰れッ。じゃあな！」

ふっ、ざまあない。

最後の表情は勲章モノだった。何たる逸材だろう相模君は。次もまた会い見えるときがあれば弄らせてもらおう。

なーんてことを、脱兎の勢いで去っていく相模君の後姿を見送りつつ懇々と考えてしまった。

吹きつける寒風の合間を縫い、一軒のコンビニへと逃れるように滑り込む。

迷い無く子猫まんを買ったのは、些細な気まぐれ。こんなもので何かがチャラになるうなんて信じることはできない。

解っている。

解っちゃいるけれど、それでも何故だか　買わずには、いられなかった。

## OTHERS！??（後書き）

これにていったん相模君終了。この数日後辺りに、トリップします。

S O F A !    〽 〽    (前書き)

時系列：楓    中学三年生。    新    中学二年生。    本編最新話まで読後  
推奨。

S O F A ! 　　ゝ　　ゝ　　ゝ

曇天が、降るぞ降るぞと急き立てる。心なし早足で家に駆け込み着替えを済ます頃には、予測通り小さな雫が点々と窓を打ちつけ始めていた。

雨は嫌いじゃない。土砂降りや嵐は好きではないけれど、しとしとと窓を濡らす静かな雨は、うちに居る分には疎ましくも感じない。部屋着に身を包みリビングへと下りてきた楓は、その静まり返った空間に、今この家には自身しかないのだと悟る。一条さんは言わずもがな、新はきつとまだ学校で、お母さんは大方夕ご飯の買出しにでも出かけているのかもしれない。ということは、今は楓しかない、ということだ。つまり、そういうこと。

広いリビングを一望し満足げな笑みを口元に湛えた彼女はそのままダイニングへと向かうと、逸る気持ちで温かい飲み物の準備へと取り掛かったのだった。

以前の家では、ありえなかったもの。そして密かに楓の憧れであったもの。それはただでさえ広くないそのスペースの半分を取ってしまったかねないからと購入できず、友人の家か家具屋か学校の応接室でしか望めなかったもの。それ、が今ここに、ある。

両手に抱えるココアの入ったコップをそつと手前のテーブルに置くと、楓はここぞというポイントに移り、少し勢いをつけてそこに腰を落着けた。弾力があり、けれど沈みすぎず硬くもなく、程よい柔らかさで全身を支えてくれるソレ。

ソファ。ザ・ソファ。イツツ・ア・ソファ。

成金の重役よろしくソファの背に両手を広げ、その真ん中に陣取った楓は、満ち足りたため息をぬふーっと吐いた。次いで足を組み、

ちょっと身体を伸ばしてカップを取りまた背を預け、誰もいないのにどや顔で気取りながらココアを啜る。上品ぶって逆に下品なことこの上ないが、誰も見ていないこと前提でやっていることなので存分に悦に浸った。

ああ、ソファ。ふかふかしてて、ゆったりできて、程よくフイットする。なんて素敵な家具なのだろう、ソファ。

いつもは一条さんの定位置のそこは、楓の密かな憧れでもあった。いつか思いっきりそこに身を沈めて、あんなことやこんなことがしたい。お行儀良くそのソファの一端に座りながら、夢想したものだ。それが今、叶う時！ 躊躇などしてられるものか。まごまごしていたら誰かが帰ってくるかもしれない。存分にその心地に浸りきった楓は幾分落ち着いた様子で再びカップをテーブルに戻すと、いそいそとばかりに体勢を変えた。

「うひゅふふふふふ。うひゅっ、むぎゅっ、うぶぶぶぶぶ」  
今しがた腰を落着けていたそこに寝転がり思いつきり足を伸ばすと、うつ伏せで半回転したり戻ったりを繰り返しながら奇怪な笑い声を上げた。誰かに見られたらそれこそ噴死できる。けれど誰もいないからこそ、おもいつきりできる。ごろごろ回転したり足をばたつかせたり頭をぐりぐり摺り寄せたりして、思い残す事は無いとばかりにその夢心地を堪能した。

ああソファ。ありがとうソファ……

「……なにしてんの」

死刑宣告の声が聞こえた。

いや、違う。消え入りそうな、新の低い声がリビングにぽつねんと転がった。片足を上げたままの状態、楓の身体がぴしりと凍りつく。

「なに、してたの」

無情な声が楓を追い込む。うつ伏せたまま、楓は声を絞り出すよ

うにして呟いた。

「……いつからいたの」

哀れなほど無感情なその小さな声に問われ、暫し沈黙が降りる。

雨が窓を打ちつける音だけが、間を繋ぐ。そして同じく新の無感情な声は、答えた。

「楓がどや顔でふんぞり返って小指立てながらココアを啜るところ  
k」

「わーーーーー！ うわーーーーー！ わーーーーっ」

彼の答えを皆まで待たず突如奇声を発した楓は素早く起き上がると、新の横をすり抜け怒涛の勢いでリビングから脱出した。後には呆気にとられたように立ち尽くす新と、誰ぞを哀れむかのような雨音が、ぱたぱたとリビングを埋め尽くしていった。

その後、楓は夕食を断り、リビングに近寄らず、新を避け、徹底して不干渉を貫き、最終的には何故か新が楓に謝罪することで事態は収束した。

一条家でこの話を蒸し返すことは、ご法度とされている。らしい。

S O F A !    } ? }    (前書き)

時系列：楓    中学三年生。    新    中学二年生。    S O F A !    } ? }  
読後推奨。

S O F A ! 　　ゝ　　ゝ　　ゝ

煙る空。薄く重たくのしかかるその色に嫌なものを覚え、早足で家へと飛び込んだ。閉じた扉の外では、ぽつりぽつりとすぐそこまで雨足が迫っていた。

自身の立てる足音以外何一つ気配を感じないこの家屋には、その静けさこそが彼女以外誰も居ないということを証明していた。着替えを済ませ何の気なしにリビングへの扉を開いたところで、楓は妙な既視感を覚える。

以前にも、こんなことは無かったか。いやあった。おぞましい記憶が蘇る。そのまだ温まりきれていない部屋の気温ゆえにか、もしくは何かを揺り起こされたのか、ぶるつと背筋を震わせ、楓はやや慎重な足取りで一度は踏み入ったリビングから退いた。そしてその足で再び階段を登ると、端の部屋から扉を開け、何かを確認し始める。自分の部屋までもノックまでして確かめた。階下も同様に確認し終わると、再び確かな足取りでリビングへと向かう。その辺りになると緊張感に張り詰めていた背筋は、幾分か和らいでいた。

ソファ。

いつ振りだろうか、この感触。無言で寄り添うように横たわりながら、視線だけ巡らせてリビングを一望する。一応、顔を上げて死角である入り口を再度確認するのも忘れない。もう二度目なので流石に奇声も上げない。というか一度で十分だ。忌まわしい痴態を思い出し、羞恥に唇をかみ締め、それでも再び会い見えたその夢のよきな感触に、ほっと一息ついた。

雨の音が、心地いい。叩きつけるような雨は好きではないけれど、しとしとと心を潤す音は聞いているだけで耳に心地いい。目



を閉じて、もつとばかりに音に集中する。

とても、静かだ。呼吸の音と、雨の音と、時折息つく自分の吐息しか聞こえない。なんて心地いいセッティングだろう。BGMなんて無くても、これで十分安眠できる。

そんなことを思っているうちに、早くもうつとうとしてきた。まずい。この状態は許しても、寝オチは許されない。起きたほうがいい。寝るなら自室で好きなだけ寝ればいい。そう、思うのに。身体は言うことを聞かず、もつとばかりに丁度いい体位にもぞもぞと動き、そして幾ばくもせず、重力に従い瞼が閉じる。

心地いい、夢の中。耳に残るのは、柔らかな雨の音ばかり。

「……楓」

帰宅して、彼女の靴があったとき、もしやとは思った。確認の為に彼女の部屋も伺い、暫しの逡巡のあとに結局こっそりとリビングを覗いてみれば、この様子。足音立てず近付き、起こす気もなさそうなほど小さな声で、彼女の声を呼びかけてみる。案の定、少しの反応どころか微動だにしない。これは完全に寝入ってるな、と思いきり、新は僅かに笑みを浮かべた。

例によって反省を生かすべく、ここは起こさないほうが得策だ。例え寝オチしたあげくに起きて家人に転寝をしたことが露見しても、心地よい眠りを妨げられた拳句再び自分にこの様を指摘されるよりはマシだと考えるに違いない。

そんな考えに至り一人納得するも、なんとなしに物寂しさは否めない。ただもうあんなことは、新だって御免だ。あの仕打ちは割と地味にきつかった。幸い、今回は当事者が寝オチな為に、事は穏便に済みそうだ。

ふっと安堵の息をつき、けれど彼は再び思い当たったように、すやすやと心地良さそうに寝入る彼女に見入る。

このままだと、風邪を引いてしまいかもしれない。楓の格好は制服のままでなかったけれど、ロングパーカーにスキニーを履いているだけだ。部屋が寒いわけではないけれど、何かかけておくに越したことは無い。

思い至るとすぐさま彼は立ち上がり、音を立てずにリビングを後にした。

眠る彼女は、未だ潤う夢の中。

「始さん」

「解ってる、紅葉さん」

秘め事を語るような極めて顰められた声で、阿吽のような会話が交わされる。

さて。

嘗て無いほど真剣な眼差しで目配せしあう二人の大人の目の前。

そこには、すやすや寝入る眠る子羊、のような二人がいた。一人はソファに横たわりブランケットまでかけて寝入っているが、もう一人はその傍に腰を下ろし、まるで顔を覗き込んだまま眠り込んでしまったかのように（実際その通りなのだろうが）、器用に寝入っている。

この光景を目にした大人たちは、すぐに事の経緯を察知した。会話も無く目線で会話した二人のうち片方は、既にどこから取り出したのかそれを携えている。御詠え向きに、いつもは気配に機敏な彼も、慎重すぎるほどに危機意識の強い彼女も、目を覚ます気配が無い。

好機。

この機会を逃すはずも無く、長年の経験から躊躇さえも省いた彼らはすぐさまそれを行動に移した。

「あーんもう！ 可愛い可愛いッ。なんにもー、この子達食べちゃいたいっ」

「紅葉さん、もうちょっと抑えて。起きちゃうよ」

「そ、そうですね。それはもったいない。あっ、あっ、ローアングルも抑えてください始さん」

「勿論。ああ、いいね。一カットごとに題名つけたい」

「ですよねッ。ああ現像が楽しみ……っ」

「とりあえず今は記憶にも存分に焼き付けておこうね」

眠る子羊二人がその盗撮写真の存在を知るのは、まだずっと後のこと。

S O F A !    〴〵    (後書き)

普段真夜中でも親父の気配に気付ける新さんが真実寝ていたかどうかは別として。

## FAMILY PRECEPTS!

### 一条家家訓

- ・ 一日一度は必ずみんなでご飯を食べるようにしましょう。
- ・ 挨拶を欠かさないようにしましょう。
- ・ ほづれんそうを心がけましょう。

### 裏家訓

- ・ 必要以上のいちやつきは教育上よろしくないので子供の前では禁止（精々手繋ぐ程度）。
- ・ 常にデジカメを常備しておくこと。
- ・ 子供達のことでは何かあったら独り占めしないで情報交換すること。
- ・ ワンショットはギリ。動画は邪道（盗撮編より抜粋）。

「この間ね、夕ご飯のあとに」  
「うん」

「かえでちゃんがお風呂から上がって、アイス食べてたの。ガリガリくんっていう、一本百円未満のアイス」

「ああ、あれ」

「そう、あれ。そしたら新君がそれを後ろからじーっと見つめててね、私なんだかきゅんきゅんしちゃって、翌日に買ってきてあげたんです。同じアイス」

「うんうん」

「それを新君に言ったらね、もう、その、目を、キラキラキラッて

させちゃって」

「うわあそれは僕も見なかった」

「そう。もう、心の録画ボタン押しっぱなし。内心可愛すぎて身もだえしちゃってたんだけど、本人気のない振りを一生懸命してるから、私も堪えました。一生懸命」

「ああもうなんだろうなあ、あの子は。なんであんなに純粹培養なんだ」

「ほんとに。それでね、私がある振りしてリビングを出て行ったら、いそいそと冷蔵庫に向かっちゃって」

「ああもう箱でも何本でも業務用でもいくらでも買ってやるのに」

「そんなに食べたならお腹壊しちゃいます。で、食べたみたいなんだけど、そのあと」

「うん（ざわ……ざわ……）」

「どうやらそれが当たり棒だったらしくて、その棒持ちながらオロオロしちゃって。丁度かえでちゃんが来たものだから、もうかえでちゃんと当たり棒交互に見つめちゃったりして」

「我が息子ながら考えてることが丸解りすぎるね」

「それでかえでちゃんがその視線に気付くんだけど」

「うん（……ゴクリ）」

「かえでちゃんは当たり棒を持って一心に見つめてくる新君にこう言っただんです。『早く捨てなよ』って。それはもう、すごくクールに」

「……クッ。可哀相だけど可愛いすぎるッ。どうしたらいいんだすごく切ない。切なくて気が狂いそうだ」

「ね。もう本当にどうしてああ期待以上なんでしょう」

「……二人とも可愛すぎるよ」

「同感です」

**FAMILY PRECEPTS! (後書き)**

一条家裏の裏の家訓

・愛情の前には子供のプライバシーも皆無

## FAMILY FOOLISH!

そりゃあ好き合っている男女なら。

と、これがまた免罪符のような問答無用のフレーズがある。妙に生々しく感じるのは年頃の潔癖さゆえか、穿ちすぎなのか、そんなことあどうでもいい。

問題はそう、その度合いというか、程度というか、はたまた種類というかもしくはレベルと測るべきか。どう定義したものかは知れないけれど、つまり、まあ有体に言えば内容による。その内容こそ、問題提起の主題である。

つまり何が言いたいかというと

おいこらイチヤついてんじゃねーぞバカカップルが、と言いたいけれど果たしてこれはバカカップルと呼ぶに相應しいか否か？ だ。

「始さん、痛くないですか？」

「うん、大丈夫だよ。気持ちいい」

議題その一。膝枕で耳掃除のコンボはバカカップルか否か。

ここで太ももでも撫でさすって「気持ちいい」「イヤンばかん」見たいな事を締まりの無い顔で応酬していたら間違いないバカカップルだ。遠慮なく冷めた視線を浴びせることができる。

ロケーションも大事だ。リビングのソファで膝枕。家族内公共の場でのその行いは、突然目にした子供から見れば些か衝撃的なものがある。

あるにはある、のにも関わらずこの有様。人がリビングに入ってきて「やだっ」とか言って照れる素振りもなければ気にする素振りもない。ごく普通に膝枕って膝枕れて耳掃除って耳掃除られて、それ以上でもそれ以下でもない。

これ、バカカップル？ バカカップルなの？ ていうかどっちかとい



うと　　熟年夫婦みたいな空気をそこはかとなく感じる。判断しかねる。

議題その二。お風呂上りに髪を乾かしあいつこする。

これはバカップルだろう。バカップルだな。しかもまたリビングだし。少しは人目というか子供のメンタル面を色んな意味で気にしろよ。

つつこむところは諸々あれど、これは間違いなくバカップルだ。

そう思っでじろりと睨みつけようかと一瞥したその時に、二人の様子をまじまじ観察してみた。

一条さんがソファに座り、お母さんがその足の間に座って髪を乾かしてもらっている。一条さんはここにこ穏和な笑みで優しくお母さんの髪を梳き、お母さんは　。

お母さん。何、その蕩けそうな顔は。なんか、こう、ホント蕩けそう。飼い主さんに顎の下をくすぐられてる猫というか、お腹をわしゃわしゃしてもらっているわんちゃんとか、そんな類の蕩けそうな顔をしている。

小動物だ、小動物がいるッ。飼い主に撫でられてものっそい気持ち良さそうな顔してるッ。

ば、バカップル？　バカ、バ　　飼い主とペット？　判断不能だ。

「つてことなんだけど、どう思う？」

行き過ぎたら忠告も辞さない覚悟だったんだけど、行き過ぎてはいないというか、私の思っでいたバカップルとはほんの少しベクトルがずれていてどうとも言えない。曖昧なままでは言及もできないので、新さんに聞いてみた。どうにもハッキリさせたくてお風呂上に廊下ですぐさま直撃した。

しかし、まるで茹でたて剥きたてほやほやのゆで卵のよう。上気した頬に張り付く濡れた髪が悩ましい。とかいちいち観察してい

る場合じゃない。

「どうって……」

そんなこと聞かれても。って顔をしている。だよね。しかもお風呂上りになんだよって感じだよね。というか新さんに聞いたのがそもそも間違いだったかも。

やっぱりもういいや、と撤回しようとしたとき、顎に手を当ててなにやら思案していた新さんが、思い立ったかのように顔を上げた。「なに、なんか解った?」

「うん。ちよつと、来て」

おう、行く行く。作戦会議でもするのだろうか。

導かれるままに新さんの部屋へと赴き、そしてさつと差し出された。

「……ナニコレ」

「ドライヤー」

「知ってる」

不毛な会話を交わしつつ、手渡されたそれではなく新さんをまじまじと見つめる。

私はドライヤーが欲しいんじゃないって答えが欲しいんだけど。その話を聞いて無性に髪を乾かしてもらいたくなっただけだ。

真剣に見つめあい、無言の応酬にて結局、新さんが勝った。

「解ったよ……」

「うん」

私が観念すると同時に、新さんはソファに腰を下ろした。私もなんだかんだ思いつつもコンセントを繋ぎ、新さんの真後ろに立つ。いやあ、それとこれとは別として、ちよつと私も気になってたんだよね。人に髪を乾かしてもらうのってそんなに気持ちいいんだろうかとか、人の髪の毛乾かすのってそんなに楽しいんだろうか、とか。

あの二人がさぞや楽しそうだったので、ついつい好奇心が。きつ

と新さんも私の話を聞いて好奇心が湧いたのだろっ。後で感想聞いてみよーっと。

主題が摩り替わったことに気付く間もなく、ドライヤーのスイッチをONにした。

#### 結論。

人の髪を乾かすのは意外と加減が難しいかもしれない。あと、あれ以来新さんは二度と私に髪を乾かさせることはなかった。

「いて」

「あ、ゴメン」

「い……ッ」

「あ、ゴメン」

「……ッ」

「あ、ゴメン」

ガツとか、ゴツとか、通常ドライヤーで髪を乾かすときには聞こえない音が、新の部屋から聞こえてくる。

ほんの僅かな扉の隙間から中を伺う二人は、微笑ましいとばかりに生温い眼差しで髪を乾かしあう子供達を見守る。勿論そのうちの一人は一人はデジカメのレンズを通してその様を見つめている。

寄り添う二人がドアに侍りつくように熱心に子供を盗撮しているという、シニールを通り越して異様な光景を指摘するものはいないので、二人は安心して目の前の子供劇場を観覧続行。

「バカ可愛いなー、うちの子達は」

「始さん、よく解りましたね。二人がこうするだろっって」

「んー？ まあ、楓ちゃんがこっちを熱心にみつめていたからねー。そのあと新の方にすっ飛んで行ったし、もしかしたらって思ってた。そしたら案の定」

「そのお陰で今日もいい絵が撮れましたねー」

「ねー。本当に期待を裏切らない子を持って僕は幸せだなー」

「私もですよー」

「ねー」

「ねー」

にここにご頷きあう親バカの目線の先には、楓にドライヤーで頭を何度も小突かれる新の姿があったそう。

**FAMILY FOLISH! (後書き)**

「新さん、髪乾かしてあげようか」

「いや、いい。頭蓋骨陥没しても困るから」

「んちゃ！ って私はアラレちゃんか」

## APRIL FOOL! (前書き)

この作品はエイプリルフルにTmが仕掛けた『嘘』です。悪ふざけの産物なので、マジに捉えず『Tm爆散しろ^^』くらいの心積もりでお楽しみください。

テーマ(というか嘘)は「こんとり更新断念につき付け焼刃最終話」。本編第一章『一条姉とお別れ』本文最後尾の段落より繋げて創作しています。

## APRIL FOOL!

【第一章の『一条姉とお別れ』、最後尾の段落より。】

そして、最後の日。見送られるのは苦手だからと、向こうに送ってくれるソロンさんだけを伴い私達は神殿を訪れた。

ソロンさんは宝玉を新さんに託して、陣の上に立つように促した。新さんと私は陣の中心に立ち、ソロンさんが呪文を唱えている横で新さんが呟く。

「姉さん。いや、力」

「新さん」

新さんが何か言いかけたのを遮った私の声と同時に、ソロンさんが「送ります」と告げた。それとともに、淡い光を放ちだす陣の内側。

私はゆっくりと新さんを見上げ、微笑んだ。きっと今まで生きてきた中で一番、心のそこからの、とびきりの笑顔で。

「さよなら新さん」

大きな目の一歩で後退し、陣の外側へ。その瞬間に、あの時と同じ光を放つ陣。啞然とする新さんをそこに置き去りにして、そして私は 異世界に一人、留まっ

ろうつとした瞬間、痛いほどの力で腕を引かれ、陣の中に舞い戻る私。

「ちょ　っ」

なんてことをしてくれたのか。これじゃ全ての目論見がバアだ。さらつと捨て台詞を吐いたつてのに、ものの見事に視界は行く前と同じ新さんの部屋に移り変わる。

台無しだ。不意を突いたつもりが、ただのアホに成り下がってしまった。それもこれも新さんの度を越した反射神経と動体視力のせ

いだ。

温度計のように頬が紅潮していくのがわかる。怒りのためか、羞恥のためか。ともかく文句を言ってやらねば気が済まない、どうにかこうにか羞恥を押し込めて顔を上げる。

と、そこには私以上に憤怒に満ちた様相を湛える新さんが、いた。

「どういうことだ……」

本当に新さんが発したのかと疑うくらい、低く低く薄暗い声で問われる。

「へっ」

「どういうことだと聞いてるんだ！ やっぱあの手紙は嘘じゃなかったのか！ 嫌いか！ やっぱ嫌いって俺のことかッ」  
ちよっ。

「なに、今はそんなこと、」

「そんなことじゃないッッ」

「はひいっ」

なに、なんなの、なんだってのこの迫力。まさかの逆ギレ？ むしろ逆上？

掴まれている腕がギリッギリ軋み力ナリ痛い。力ナリ痛いけど、怖くてうめき声すら出てこない。阿修羅象も涙目になるくらい怒ってはる、怒ってはるよこのお人。

「嫌いつてなんだ、えっ？ 俺が嫌いなのか！ どこが！ どういった風に！」

「ちよ、おち、落ち着いて」

「これが落ち着いていられるか！ 俺が嫌いだと？ きらっ、嫌い？ 嫌いイイイイ？」

「ひええええ、お助けッ」

自分で連呼して自分でボルテージ上げないでよっ。私一回しか言っていないじゃん。しかも手紙。更に今更。

ていうか形勢逆転どころか下克上にも程があるでしょこの展開。



誰が予想したよこんなある意味バッドエンドッ。

「嫌い……」

ふと、突然新さんの勢いが沈下したように制止した。ぼつりと呟いたかと思えば、私を掴んでいた腕ごと弛緩するようにだらんと下げ、俯いた。

そんなにショックだったのかな。

罪悪感のような悪寒のような奇妙な心地になりながらも、恐る恐る様子を伺う。さっきみたいなのも怖いけど、あんだけ騒いでおいでいきなり黙られるのも結構怖い。

ここは逃げたほうがいいんじゃないだろうか。ていうか脱力するなら手は離してよ。ここまでしといて手を離さないとかなにその無駄な執着心。とりあえずここは、刺激しないように手を離して、速やかに逃げるしかない。とにかく逃げるしかない。逃げ切れるかどうかは、まあ、置いておいて。

思い立ったがすぐさま新さんの腕を外そうともう片方の手を伸ばす。

と、思いきや、まるでチーズの罠にかかった鼠の如く、そのもう片方の手も捕まり、実質両手をふさがれてしまう。新さんはまだ、項垂れたままだ。

「な、なにかな新さん。ゲームは、ほら、また今度にしょ？　ね？　とりあえずお互い疲れてるだろうし、ちょっと休んで……」

「ふ」

ふ？

「ふふふふふふふ」

ひえええええええ。

「解った。解ったよ。よく、解った」

一文に三回も解ったって言った。怖い。もう何を言っても怖い。駄目だ、謝ろう。謝って全部嘘だよって言ってなかったことにしよう。そうしよう。それで隙ができて両手が開放されたらダッシュで逃走経路確保して、「嘘じゃねーよバーカッ」って言い逃げしよう。

そうしよう（懲りない）。

「あ、あのね新さん……」

「解った。もういいよ。大丈夫。大丈夫だから」

何がアアアアア。

一から十まで一つも大丈夫そんなところが見当たらないんですけどッ。

そして戦々恐々と戦く私に新さんは、この上なく優しい声と穏やかな笑顔を向け、がっちり私の両腕をホールドしたまま言い放った。

「じつつくり、話し合おうか姉さん。いや、楓。どこがどう嫌いなのか、一つ一つ話し合って、一つ一つ潰していこう」

「いや、あの、」

それは話し合いで潰せるって問題じゃ……

「大丈夫。とことん話し合えば、楓も変わるよ。きっと好きになる。というか好きになるまで話し合おう。大丈夫、時間は腐るほどある」

「ちよつと、待つ」

「大丈夫だよ。きつと大丈夫。絶対大丈夫。大丈夫大丈夫」

ひiiiiiiiiii。

ちよつと、待って。夢だと言って。嘘だと言って。

こんな、ちょ、アッ。

APRIL FOOL! (後書き)

終わぬ

嘘じゃなきゃTmが困ります。

エイプリルフールでした。

今後も継続して書いていきたいと思しますので(勿論本編の続きを)、こんとり共々Tmをよろしくお願いします。

## 超絶ギャングバレリーナファイターアブさん（前書き）

### 注意事項

- ・この作品は本編（COMPLEX TRIP!）とは全く関係のないパラレルワールド的なお遊び小話です
- ・この作品はエイプリルフールにTmが『こんとりやめて新連載始めるから』と告げた嘘新連載より派生した小話です
- ・アブラムさんのイメージを著しくぶち壊す危険性があります
- ・アブラムさんがちよつと現代風な喋り方をしています
- ・世界観が謎です
- ・アブラムさんが可哀想です
- ・アブラムさんが可哀想です
- ・彼が一体何をしたっていうんでしょう。ただ普通に生活して、ちよつと主人公っぽい人と絡んで、それなのにこの仕打ち……

## 超絶ギャングバレイリーナファイターアブさん

この世の悪とは、何を指すのか。元来、人々は善悪の定義に立ち向かったが、未だその確たる答えは導き出されていない。

それでも私は思う。正義とは、己の心が培うもの。悪とは、各々の心に宿るもの。そしてここにまた一人、己の正義を培う勇者が一人。

そこは古びたビルの二階に居を構える、寂れた事務所。けたたましく耳障りな騒音とも呼べる警報音が、突然鳴り響いた。疎ましくも耳慣れたその騒音に彼の眠りは著しく妨げられ、不快な故に眉間の皺をより濃くさせる。まだ眠い。けれどこの悲鳴のような警報を見逃すことはできない。ソファに横たわる彼はその熊のような身体をのそりと起こし

警報を消して二度寝した。

「寝ないでください。襲われたいんですか」  
「うわっ」

耳元で囁くと、コンマ二秒で起き上がった。流石だ。常に正義と危険の狭間に身を置くものは、身のこなしも違うらしい。

「いや明らかお前のせいだろ。鳥肌立ったぞ」

「人のモノローグにつっこみを入れてはいけませんアブラムさん。人権侵害ですよ。なによりルール違反です。次はありませんからね」

「モノローグってお前まるまる声に出して喋ってるし」  
「言い訳無用です」

じろりと睨むと、耳をさすっていたアブラムさんは途端口を閉じる。これも日々の調教、いや躰、じゃなくて鍛練のお陰だろう。

着実に正義の味方としての土台が出来上がってきている。素晴らしい成果だ。

満足した私は寝起きのアブラムさんを一頻り視姦、いや心のREC、じゃなくて朝の健康チェックを済ませ、早速例のコスチュームを彼に手渡した。言わずもがな可愛いバレリーナ衣装（白鳥さん付）だ。

「さっ、事件ですよアブラムさん。早くこれに着替えてください」

「やだよ」

なぬつ。間髪入れぬ即答とは。やれやれまったく、昨今の正義の味方はまずごねるのがセオリーらしい。でも解っている。彼は文句を言いつつも、やることはきっちりやり通す男なのだということを。

「いや、やらないからな。そのしたり顔止めてくれ」

「……何が気に入らないって言うんですか」

「何がってなにもかもだよ」

どうやら今日の正義の味方は少々ご機嫌斜めらしい。まるで思春期の中学生みたいなことを言い出す始末。寝ている間に邪気眼でも患ったのだろうか。

面倒くさそうにガシガシと頭をかいてソファに座りなおすと、胡乱げにあくびをした。完全にやる気が無いらしい。

「もう勘弁してくれよ本当。お前のお遊びに付き合ってるほど暇じゃないんだって、俺」

「お遊び？ 心外ですね。これは正義の味方である貴方の義務なんですよ」

「いや俺は誰の味方でもないよ」

「またまたそんな中立クールキャラ気取っちゃって。キャラ設定はもう変更不可ですからね！」

「なんだキャラ設定って！ さっきから色々ルール違反してるのお前だろうが絶対」

私はいんです、私は。そんなことより、警報が鳴ってからもう随分経っている。早く駆けつけねばまた罪も無い市民が犠牲になってしまう。それだけは避けなくてはならない。

私は一度は跳ね除けられたそのコスチュームを、再び彼に押し付けるように差し出した。

「いいから、さあ着替えてアブラムさん。　いえ、超絶ギャングバレリーナファイターアブさん！　　出番ですよ！」

「なんだよギャングって……その名前もさあ……もう勘弁してくれよ。俺もうついていけないよ」

「いいんですよなんだって！　　昨今はただのおっさんよりチョイ悪親父くらいが丁度いいんです！」

「いや悪いけどそれも絶対古いから。お前が思ってるほどウケてないからそれ」

説明しよう！　超絶ギャングバレリーナファイターアブさんとは、

「おいなんでいきなり解説始めてんだ」

世にはこびる悪を一掃するため非公認勧善懲悪機関『アブさんファンクラブ名誉会員』

「なんだ名誉会員って。名誉毀損会員に改名しろ。そして今すぐ跡形もなく解散しろ」

によって作り出された、俗に言う正義の味方なのである。彼は日夜悪の秘密結社『イチジョー』と戦っている。そしていつの日かイチジョー大元帥アタラを倒し、世に再び至上の平和をもたらすことが、彼に課せられた使命なのだ！

「俺の平和は誰が保証してくれるんだ。ん？」

戦え、アブさん。悪に打ち勝て、アブさん。

「悪はお前だよ」

真の平和はもうすぐそこに　　！

「聞けよもう本当やだコイツ。親御さんは何してるんだよ娘がこんなになるまで放っておいて大惨事にも程があるだろうコレ」

「何か言いました？」

「言ってません」

文句を言いつつもここぞというときには従順だ。これぞ洗脳、いや教育、じゃなくて信頼関係のなせる技なのだ。やっぱり私の目に狂いは無かった。再び私は満足すると、おもむろにアブラムさんのシャツに手をかけた。

「……なんだこの手は」

「着替えるんですよ。モタモタしないでください、さあ。今日は特別に私が手伝ってあげますから」

「……やめる」

「早く脱いでください」

「やめろって」

「早く脱いでってば」

「よせって」

「脱げって」

「やめっ、ちよっ、ア

ツツツ！」

こうして日夜、バレリーナファイターアブさんは世のため人のため、悪を正し正義を貫くのだ。けれどそれを知っているのは、『アブさんファンクラブ名誉会員』と、私だけ。

ホラ、貴方の街にももしかしたら。



超絶ギャングバレリーナファイターアブさん（後書き）

終（わらせないと可哀想）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7362o/>

---

COMPLEX VARIETY!

2011年8月6日21時50分発行